

歩 & 目 デス 定 ラテス

Vol.90

『ジ・アース』が 目指したものは？

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

令和となり、流石にまだ「平成は遠くなりにけり」とまでは思わないが、それでもアノ平成の30年はどういう時代だったのだろうか、と考えることがある。

ここに一冊の地域文化誌がある。その名は『ジ・アース The Earth』、その創刊号だ。コンテンツポラリー・マガジンとの飾り言葉も付けられていて、発行日は1989年1月25日、そう平成元年が始まったばかりの頃に颯爽とこの冊子は登場した。編集・発行人の忽那修徳氏は、その創刊宣言の



ジ・アース誌

中で『ジ・アース』は愛媛における地方の高まりやイマジネーションを喚起する接地点でありたいと思っています。」という一文を高らかに載せている。冊子の内容は、標榜するところの愛媛情報テンコモリで、しかもそのそれぞれのクオリティが高い。創刊号での内容のいくつかを紹介しよう。

「愛媛の美術・台頭してくる作家たち」「新建築」「伊予のわざ師たち」「創意工夫・味の匠たち」「トイレ文化考」「愛媛のまつり風土記」「衛星時代」「夫と妻の文化人類学」「民家は語る」「埋蔵文化財」「伝統芸能」「自然」「エンジョイ・アウトドア」「町並みを訪ねて」「天然記念物を歩く」「道具考」「愛媛先人列伝」「子規民俗学の可能性」「地域づくり人物ドキュメント」「トーキング・ナウ」などなど。全ては掲載しきれな



犬伏武彦氏「民家は語る」



青木光利氏「瀬戸内島回廊」

いが、最後には「(財)愛媛県まちづくり総合センター・インフォーメーション」まである。略称「まちセン(昭和61年設立)」はこの「舞たうん」を発行している(公財)えひめ地域政策研究センターの前身である。

これらの表題だけを追ってみても、氏が愛媛の何を見つけて何を知らせてもらおうとしたのか、何となくイメージが出来る。アート系のものから建築、職人文化、町並み、考古学に民俗学、各種文化財、あるいは過去と現在の活動する人物そのものにも光を当てようとしている。そうした愛媛を形作ってきた、または今も形作っているとされる各ジャンルについて、様々な人の目線を通じて、年に六回の発行継続により浮き彫りにさせたかったに違いないのだ。事実、「愛媛の美術」や「新建築」では、若い作家や建築家の人と作品が紹介され、職人さんが支える味の世界など、筆者などは興味津々で読ませてもらった。中でも犬伏武彦氏の「民家は語る」は人気のページで、第一回は西条市氷見の森家だった。この歩キ目デスでも前々回取り上げたので読者諸氏にも少しは馴染みかと思うが、当時はそれこそ犬伏先生が発見した名建築だった。毎号掲載される先生の号は実に知られる愛媛の建築文化が紹介されていてワ

クワクしながら読んでいた。矢野徹志先生の「町並みを訪ねて」の第一回は双海町上灘、これも木蝋で栄えた灘通りについて、町の人の語りごと自身スケッチによる絶妙なコラボで掲載されている。

平成3年の13号からは建築家青木光利氏の「瀬戸内島回廊」が始まる。まさに愛媛の地政学上の「境界領域」を、氏が丹念に涉獵する展開を、毎号楽しみみにしていた。筆者にも何か書いてみませんか、との打診があり、結局この号から「石垣のある風景」で連載参加させて頂く事となった。そもそもは町並みを書きたかったが、先行する二編があり、では石垣の取材でもやってみましょうかというノリだった。それも、城の石垣は研究者も居るのでむしろ私は「野良の石垣」を書いてみたい、と。そうした初回はまず三崎町井野浦の「畑を囲む青石」からだった。

ともかく、そうして続いていったジ・アースだったが、平成7年の5月、驚愕のニュースが飛び込んでくる。編集者の忽那修徳



西条市氷見・住吉屋森家

氏が亡くなつたと。丁度それは、39号が

刷り上がりご自宅に届いた

朝の事だったという。晴天の霹靂とはこのこと、忘れもしない、松山市高井地区では辺り一面が麦秋の真つただ中だった。以来誰言うとなく、それは毎年「麦秋忌」として忽那氏を想う季節の到来を意味する。

結局その後有志が集い、亡き編集子の目指す形でジ・アース「愛媛からの鼓動VOL・40」最終号が編纂され、類まれな地域文化誌ジ・アースは終刊となったのだ。特集は神奈川大学常民文化研究所の網野義彦先生をお呼びして8月に開催された二神島シンポジウム。大分からは湯布院の中谷健太郎氏も駆けつけ、忽那氏が追い求めた「境界領域」をテーマに、網野先生の基調講演を元に『地域』をよみなおす『観点からのパネルディスカッション』も実施された。それはそれは、暑い暑い島の一日



二神島シンポジウム

だった。

振り返れば平成7年は、あの阪神大震災が起こった年であり、ウィンドウズ95が発売され、時代はまさにIT革命へと舵を切り、その後の災害列島への予兆をも示していた。その時の流れの大きな転換点にジ・アースの終刊があり、忽那修徳という人物の最期があつた事になる。令和となつた今その当時を思えば、奇しくもその刹那自体が時代の境界領域だったのであつたか、とも思えるのだ。ジ・アース、ピフオーアフター。令和の接地点、それは一体どこにあるのだろうか。

【ご案内】

2020年1月25日 PM2:00
愛媛県立美術館講堂にて
創刊30周年顕彰フォーラム

「ジ・アース」が目指したもの
—君は忽那修徳を知っているか？—

2020年2月4日(火)〜9日(日)
NHK松山放送局アートギャラリー
「忽那修徳を囲む『ジ・アース』な
人々展」